

4 分析結果の概要（詳細分析は、8ページから24ページに掲載）

（1）論理的な文章（大問〔一〕）を読む力について

池内^{さとる}了『科学の落とし穴 ウソではないがホントでもない』から出題した。技術の進歩がこれまでに人間の身体や頭脳に影響を与えてきたように、道徳心にもまた影響を与えるのではないかという問題提起の文章である。文脈に即して「技術」「能力」等の語句を補う設問では得点率が高いが、これらの具体的内容を選択する設問では中・下位層の正答率が低い。また、字義通りでなく皮肉を込めた表現の意図についても、特に中・下位層の正答率が低く、効果的に主張を展開するための文章構成や表現技法についての指導が必要である。

（2）文学的な文章（大問〔二〕）を読む力について

橋本^{つむぐ}紡の小説『猫泥棒と木曜日のキッチン』から出題した。日常にそれほどの不満も抱かずに生活していた高校生の「わたし」が、捨て猫を拾ったことを契機に、不条理に不幸な状況に置かれることの痛みを自覚し始める場面である。上・中位層と下位層との差が大きく、フィクションを読むことに慣れていない生徒には、登場人物の行動や互いの人間関係を理解できるように、一定のまとまりのある文章を読ませるといった指導が必要である。

（3）国語基礎力（大問〔三〕）について

設問は、取材メモと会話文、慣用表現、助詞の識別、漢字の読み書きについて出題した。国語基礎力に関しては、抽出校を対象に設問中にある語句の使用状況等に関する事後調査を実施して分析に活用しており、設問において正答率の低い語句も、日常的に接する経験はあるという傾向が見られる。授業その他の言語環境に配慮することで、接する機会のある語句を語彙として使いこなすことができるようにするための指導が必要である。また、これまでに学んできた言語活動の形態が多様であることも明らかになっており、高等学校の授業においても言語活動の機会を設けて思考・表現の能力を高めることが必要である。

（4）古文（大問〔四〕）を読む力について

『御伽草子』より出題した。平易な文章の孝子譚であり、上・中位層は概ね内容を把握することができている。ねらいに応じた教材を選択することで、古文においても内容について考えさせる学習活動を展開することは、学習意欲向上のためにも効果的であろう。